様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月６日現在

機関番号：３２６２３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０５５９
研究課題名（和文）　近世東南アジア交易世界の研究－日本町ネットワークを中心に－

研究課題名（英文）　Research of the trade system in Southeast Asia at the early modern age - about the Japanese Town network－

研究代表者
菊池　誠一　（KIKUCHI SEIICHI）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：４０３２７９５３

研究成果の概要（和文）：ベトナム・ホイアンで出土した考古学資料には、陶磁器や銅銭、キセルなど多様な遺物がみられる。17 世紀の陶磁器は、中国や日本、ベトナム、タイのものである。なかでも日本の肥前陶磁（伊万里焼・唐津焼）が大量に出土し、また長崎で作られた長崎貿易銭もある。さらに、タイ土器から生漆が検出されるなど、ホイアンが当時の交易拠点のひとつとして位置していたことがわかる。出土遺物から、ホイアンは、日本と東南アジア諸国をつなぐ港町であり、そこに存在する日本町はそのネットワークの要であった。

研究成果の概要（英文）：The archeology artifact excavated in Hoian in Vietnam includes various artifacts like a pottery, the copper coin and the a tabacco pipe, etc. The excavated pottery of the 17th century includes the pottery of China, Japan, Vietnam, and Thailand. Especially, a large amount of Hizen potteries of Japan (Imari ware and Karatsu ware) were excavated. The raw lacquer was discovered from the earthenware made in Thailand. Moreover, Nagasaki trade coins made in Nagasaki was excavated, too. The result of these investigations is proven that Hoian is one of the bases on the South China Sea trade network, at that time. Hoian was a port city that connected Japan to Southeast Asia countries. The Japanese Town that existed in Hoian was an important base in the trade network.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	800,000	240,000	1,040,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：日本・ベトナム・交易交流・陶磁器

１．研究開始当初の背景

本研究にかかわるこれまでの研究は、戦前の黒板勝美と岩生成一による東南アジア調査の成果をまとめた「南洋に於ける日本関係史料調査報告」がある。これは、インドネシアやベトナム、カンボジアなどに遺る日本関係遺跡や碑文等の調査報告である。そして、岩生成一は、この成果とオランダ東インド会社文書等のヨーロッパ史料をもとに『南洋日本町の研究』『続南洋日本町の研究』等で研究成果を公表し、東南アジアにあった「日本町」の実態をはじめて公にした。

しかし、この研究のなかで、東南アジアにおける関連資料や遺跡の調査は、時代的制約をうけており、考古学資料や現地における古文書の活用は少ない。

こうした研究状況は、1990 年代になると東南アジアの各国において政治的安定がみられ、外国人研究者の現地調査が可能となり、大きくかわった。研究代表者は、ベトナムのホイアンに存在した「日本町」の考古学調査を 1993 年からすすめ、かつカンボジア・ピニャルーに存在した「日本町」の調査にも参加した。こうした近年における考古学資料の活用が本研究の重要な視点である。考古学資料である遺跡や遺物（陶磁器・銅銭・梵鐘・碑文など）と古文書などを活用して、東南アジアに存在した「日本町」のネットワークを解明し、東南アジア近世社会と「日本町」ネットワークの歴史的位置づけをめざすものである。

２．研究の目的

本研究は、近年大きく進展した東南アジア近世遺跡の調査成果と現地史料をもとに、17 世紀における東アジア海の交易・交流活動の様相と日本人のかかわり、また東南アジアに存在した「日本町」の活動とそのネットワークの実態を明らかにすると同時に、近世の東アジア海におけるモノ・人・技術の交流と交易の実態を明らかにし、それに大きくかかわった「鎖国」以前以後の「日本町」と東南アジア在住日本人の活動実態を浮かび上がらせることを目的としている。

この東南アジアに存在した「日本町」ネットワークの視点を導入することで、東アジア海の交流史の再構築といまだ王朝史観が幅をきかせる東南アジアの歴史像を、商品・流通・交易に立脚した視点を導入することで、これまでの歴史像を変革させる可能性がある。

東アジア海は、古代から近世にかけて重層的な交易・交流ネットワークのなかで、17～18 世紀の近世にあたる時代は、東南アジア世界がこのネットワークのなかに大きく組み込まれ、展開した時代である。このネットワークの要に、17 世紀初頭頃から東南アジアの各地に成立した「日本町」が深くかかわっていた。しかし、「鎖国」以後の「日本町」の実態と日本人の活動については、あまりはっきりとはしない。

本研究では、東南アジア近世遺跡の調査成果を活用し、上記の研究目的を達成し、「日本町」ネットワークの視点を導入した日本と東南アジア諸国の交易・交流史の再構築をはかり、かつその成果を相手国側の歴史学界に還元し、東アジア海を巡る共通の歴史認識の土壌を構築したい。

３．研究の方法

東南アジアの「日本町」関連遺物を収集する博物館資料調査と「日本町」跡地の現地調査、出土遺物などの調査を実施した。調査にあたっては、相手国の研究機関と共同調査の体制をつくり、実施した。

具体的には、下記の通りである。

(1)　平成 20 年度は、ベトナム・ホイアンにおいて 17 世紀の出土遺物の調査を実施した。具体的には、資料の水洗い・注記・写真撮影・実測などである。また、市内の博物館において資料調査を実施した。

(2)　平成 21 年度は、ベトナム・ホイアンにおいて大量に出土している陶磁器類の整理調査を実施した。また、2009 年 8 月のホイアン調査期間中に、ホイアン国際シンポジウムが開催され、研究代表者は、歴史・考古分科会を組織した。この分科会には、日本・台湾・ベトナムの研究者や学生が参加し、交流した。さらに、出土遺物を一同で観察し、意見交換をおこない、調査の途中経過を外国人研究者にも公開した。

(3)　平成 22 年度は、ベトナム・ホイアンにおいて大量に出土している陶磁器類の整理調査を実施した。また、2010 年 12 月に昭和女子大学において、ホイアン国際シンポジウムを組織し、日本・台湾・ベトナム・イギリスの研究者・学生が参加し、研究交流を実施した。このシンポジウムには、皇太子殿下と彬子女王殿下のご臨席をいただいた。

また、国内調査として、三重県松阪市において角屋関係史料の調査を実施した。

ベトナム人研究者と遺物整理

４．研究成果

以下、個別資料である考古学資料から述べたい。

(1)出土遺物の様相

①陶磁器

ベトナム・ホイアンで出土した食器類（陶磁器）の生産地別変遷の様相と時期別変遷の様相が明確になったことである。

生産地別の変遷は、17 世紀前半にあっては、中国の景徳鎮窯系と福建・広東窯系の碗・皿が多くみられた。17 世紀後半になると、日本の肥前陶磁器が多くみられ、18 世紀になると中国産のものに代わる。17 世紀には、少ないがタイの土器もみられ、その中には生漆が検出された。

陶磁器の生産地別のあり方と変遷から、「日本町」の存在していた 17 世紀初頭から後半の間、肥前陶磁を介した東南アジアの「日本町」と日本の交易・交流の姿が浮かび上がってくる。つまり、肥前陶磁を扱う商人に在住日本人が関わっている可能性が、ホイアン出土肥前陶磁の様相、つまり出土状態、分布などから読み取れる可能性がでてきた。

ホイアン出土の肥前磁器

②日本銅銭

ベトナム・ホイアンから長崎で作られた長崎貿易銭が出土している。これは、17 世紀に日本から多量の銅銭がベトナムに輸出されたという文献の記録を裏付けるものであろう。日本銭が一定の割合で市場に流通していた可能性がある。ホイアンだけではなく、ベトナム北部で寛永通寶銭も確認されており、銅銭を介した日本とベトナムの関係が確認できた。

③陶器製キセル

ホイアンから無釉陶器で製作された 17 世紀のキセルが確認された。これは、ベトナムにおける喫煙文化とタバコの伝播を考える上で貴重な資料となる。

東南アジアのキセルは、現在までのところミャンマーとラオス、そしてベトナムで陶器製キセルが作られていたことが確認されている。しかし、ホイアンで確認されたキセルは、形態的に、また紋様がない点で、ミャンマーとラオスのもの、あるいはヨーロッパのクレイ･パイプと相違する。

ホイアン出土のものは、形態的には、日本の金属製キセルに近い。そのため、17 世紀のホイアン在住日本人が使用した可能性が考えられる。このことは、ベトナムへタバコが伝播するひとつの経路として、日本から東南アジアへの伝播も視野に入れる必要がでてきたことである。

ホイアン出土の陶器製キセル

④漆の検出

ホイアンから出土したタイ土器に生漆が付着していたことが科学分析によって確認された。これは、ホイアンにあった「日本町」を介して、近世の日本に運ばれたルートを考える上で重要な成果であった。

17 世紀のタイの土器に付着した漆

(2) 近世東南アジア交易世界の中のホイアン

ホイアンから出土した陶磁器などの考古資料から、近世東南アジア交易世界において、ホイアンは、日本・中国・タイなどとの交易・交流関係があった。そのなかで、日本の陶磁器や銅銭、日本製キセルを模した陶器製キセルが出土するなど、日本との交易の要に位置していた状況が読み取れる。また、ホイアン出土のタイ土器に付着した漆は、近年、日本の遺跡から検出されているタイ産漆の搬入ルートを推定する上で重要な発見となった。

このように、個別考古資料から、近世東南アジア交易世界の中でホイアンの歴史的位置づけが可能となりつつある。今後は、近隣のタイに存在したアユタヤ「日本町」やカンボジアの「日本町」の出土遺物と比較研究していく必要がある。課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①三宅俊彦・菊池誠一、ベトナム北部の一括出土銭の調査-ベトナム中・近世貨幣流通の実態解明に向けて-、東南アジア-歴史と文化-、査読無、38 巻、2009、209-221
②菊池誠一、越南会安亜洲海域交流的角色、故宮文物、査読有、320 巻、2009、28-39
③菊池誠一、インドシナ半島の農耕・金属器と弥生文化、弥生時代の考古学、査読無、1 巻、2009、68-88
④菊池誠一・飯島武次・早乙女雅博・西藤清秀・小野昭・佐々木憲一・新納泉、日本考古学と国際交流、日本考古学、査読有、28 号、2008、155-180

〔学会発表〕（計５件）
①菊池誠一、朱印船交趾渡海図と考古学調査、ベトナム・ホイアン国際シンポジウム、2010 年 12 月 4 日、昭和女子大学
②菊池誠一・小野田恵・半田素子・根本薫・堀内秀樹、ベトナム・ホイアン出土陶磁器(2)、日本考古学協会第 76 回総会研究発表会、2010 年 5 月 23 日、国士舘大学
③飯塚義之・内田純子・菊池誠一・三宅俊彦、ベトナム一括出土銭の金相分析、アジア鋳造技術史学会、2009 年 8 月 30 日、東京芸術大学
④菊池誠一・小野田恵・半田素子、ベトナム・ホイアン出土の陶磁器(1)、日本考古学協会第 75 回総会研究発表会、2009 年 5 月 31 日、早稲田大学
⑤三宅俊彦・菊池誠一・櫻木晋一・大内俊二、ベトナム北部出土の一括出土銭の調査、日本考古学協会第 74 回総会研究発表会、2008 年 5 月 25 日、東海大学

〔図書〕（計５件）
①KIKUCHI Seiichi、Nha Xuat Ban The Gioi、Nghien cuu Do thi co Hoi An、2010、322
②菊池誠一・阿部百里子編、高志書院、海の道と考古学ーインドシナ半島から日本へー、2010、139-155
③今村啓爾、菊池誠一、同成社、南海を巡る考古学、2010、183-201
④大橋康二・菊池誠一・坂井隆・北川香子・佐藤由似・金田明美、九州近世陶磁学会、世界に輸出された肥前陶磁、2010、123-132
⑤菊池誠一・桃木至朗・角山榮・藤田明良・深見純生・吉川利治・吉田豊、堺市、アジアの海がはぐくむ堺－中近世の港町ネットワークを掘り起こすー、2009、20-21

６．研究組織
(1)研究代表者
菊池　誠一（KIKUCHI SEIICHI）
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：40327953